

9 浅田宗伯と黄遵憲

陳 捷

一八七七年(明治十年)十一月十六日、何如璋を公使とし、張斯桂を副使とする清国駐日公使団の一行三十余名は横浜に到着。以後彼らは近代における第一回の駐日公使団として各種の外交事務を遂行するとともに、公使館各員と日本の諸分野の名士との間に交流活動が展開されることとなった。日本の医界において清国公使館の賓客となった人物には浅田宗伯・今村了庵・遠田澄庵・森枳園・永阪石棣・松井操などがある。そのうち、とりわけ浅田宗伯は、頻繁に歴代清国公使および公使館員と漢詩文を唱和し、書簡を交すなどして親交を深め、学問と医术の両面にわたり在日中国人の高い評価を受けた。以下本報では、浅田宗伯と清国公使館参贊官・黄遵憲の交流関係について考察する。

黄遵憲(一八四八〜一九〇五)、字は公度、広東嘉應州(広東省梅県)出身。一八七七年、参贊官として公使何如璋に随行、来日した。一八八二年には日本から米國サンフランシスコ総領事に転じた。著書に『日本雜事詩』があり、日本の歴史、政治、文化、風習に通じた。一八八七年に脱稿した『日本国志』は、彼の系統的日本研究の集大成で、「數百年來不世出の奇作」と評価された。『日本雜事詩』初版本に収録された第一三一首の「素問殘箋余石匱、幾人抱古守岐黃」の句の自注には、「今、浅田宗伯ありて最も医を知る」といつている。一方、浅田宗伯が服部甫庵に宛てた手紙には「(太素ハ)先達テ松井操ヨリ清公使江相贈リ、彼国ニテモ殊ノ外珍重之由、委曲ハ日本雜事詩ニ有之候間、定テ御承知ト奉存候」(五十嵐金三郎編『浅田宗伯書簡書』所収第七三号)、「黄遵憲精学ノ人故、決而杜撰ハ不仕候」(同書所収第七五号)という黄遵憲の詩に符合する記述がみられる。また、『日本国志』には黄遵憲の浅田宗伯に対する次のような論評が載せられている。「浅田宗伯……天資豪爽、学問該博。凡そ医家の書、搜索貫穿せざるは莫し。長を取りて短を捨て、蓄積浸涵、己にこ

れ有るが若し。其の病を診るや、応変投機、一説に膠かず……」。

浅田宗伯の『栗園遺稿』巻一には、宗伯が黄遵憲に宛てた文章五通が収録されている。その内容は次の五種である。①何如璋に安井息軒遺稿序文の依頼の仲介を請う。

②惠贈文に対する感謝、ならびに贈呈した医書書目に指正を請う。③新著および道士巾の惠贈に対する感謝、ならびに『仙桃集』所載詩の指正および序文を請う。④『仙桃集』への惠贈序文に対する感謝。⑤惠贈序文に対する感謝。また、黄遵憲が浅田宗伯の著作に対して寄せた序跋には、「先哲医話跋」(一八七九)、「仙桃集序」(一八八〇)、「牛渚漫録序」(一八八一)などがある。これらの資料から、浅田宗伯は黄遵憲の療治をなしていたことが知られ、兩人は文章を通じてだけでなく、医者と患者としてより親密な関係にあったことがうかがえる。

明治初年から明治十年代にかけて、日本所伝の漢籍および準漢籍が中国に輸出されるにともない、日本漢方医学が中国に伝入することになった。当時、日本伝存の医籍を精力的に購求した人物に、黄遵憲来日の三年後に清

国公使館随員として来日した楊守敬がいる。ただし、日本医学の歴史および実情を中国に紹介した人物といえ、やはり黄遵憲の功を第一とすべきであろう。『日本国志』の中の工芸志では、中国医学の日本への伝播の経緯、各時代における医学制度の変遷、日本の代表的医書、医学の流派などがあまねく概括してある。とくに注意すべきは、黄遵憲の記述がその賞賛するところの浅田宗伯の『皇国名医伝』に負っていることである。『皇国名医伝』(正編および前編)と『日本国志』を比較すると、『日本国志』工芸志の日本医学史に関する記載は、材料から文章に至るまで、相当部分が浅田宗伯の著述に依拠していることが判然とする。『皇国名医伝前編』は一九三六年に立つて中国で出版されたが、その内容の一部は黄遵憲の『日本国志』によってすでに早くから中国に知られていたということができる。

(東京大学人文社会科学研究所／北里研究所東洋医学総合研究所
医史学研究所／北京大学)